

## 学会レポート (CROI 2017)

横浜市立市民病院感染症内科

吉村幸浩

初めて CROI へ参加しました。会場は巨大スクリーンが 6 つもある広いところで、サザンオールスターズのコンサートかと思いました。案の定表彰されたミュージシャンの歌が披露され、驚きの中で学会が始まりました。

学会中はオーラルからポスターまでみっちり勉強しました。新規薬剤に関する発表では Bictegravir (BIC) と Doravirine (DOR) が印象的でした (#41、#45)。前者は新規のインテグラーゼ阻害薬 (INSTI) です。既存の INSTI への耐性株に対しても試験管内での効果が認められています。治療未経験者に対して BIC/TAF/FTC 対 Dolutegravir (DTG) /TAF/FTC の RCT が行われ、48 週のスナップショット解析では血中ウイルス量 50 コピー未満の達成率は 97%/91%、ウイルス学的失敗は 2 例/6 例、使用薬剤関連耐性はみられませんでした。忍容性は良好で、有害事象による中止は BIC 群で 1 例みられたのみでした。また臨床検査値も 2 群に大きな差はなく、eGFR の変化は 7/11.3 mL/min でした。また後者は新規の NNRTI で、同クラス薬剤耐性株に対しても試験管内で効果が示されています。治療未経験者に対して DOR+2NRTIs 対 DRV/r+2NRTIs で二重盲検化試験を行い、48 週におけるウイルス学的効果は 84%/80%と DOR の非劣性が示されました。ウイルス学的失敗は 11 例/13 例にみられ、薬剤関連耐性の出現は認めなかったが、コンプライアンス不良で中止となった DOR 群 1 例が DOR 及び FTC 関連耐性変異を生じました。有害事象による中止は 6 例/12 例であり、皮疹や神経心理異常は 2 群に有意差がありませんでした。LDL コレステロールや中性脂肪は DOR 群に有意に低値でした。DOR は DRV/r と比較して抗ウイルス効果に遜色なく、忍容性に優れていたことが示されました。これらは数年内に本邦で利用可能になる見込みであり、これら 2 剤は既存の ART による副作用や相互作用に悩む患者さんに対して有用な薬剤となりうると考えられました。

またインテグラーゼを使用したエイズ症例で免疫再構築症候群 (IRIS) が多く発生するものと経験的に感じていた中、それを裏付ける研究結果が発表されました (#731、#732)。両者はオランダ、フランスの多施設後ろ向きコホート研究でした。#731 では INSTI 群/非 INSTI 群における IRIS 発症率は 69 例中 28 例/300 例中 16 例であり、オッズ比 3.25 (95% CI 1.83-5.80) と有意差がみられました。#732 では、INSTI 群/非 INSTI 群における IRIS 発症率は 398 例中 12 例/1889 例中 29 例であり、オッズ比 1.99 (1.09-3.47) と INSTI 群で有意に多く IRIS が生じていました。中枢神経系の日和見疾患など IRIS を生じると予

後不良な例では、INSTI 以外のレジメンで抗 HIV 治療の導入がベターであると考えられました。

今後は今回の知見をもとにして国内での臨床と研究をより充実させます。そして、今年には日本人の口演演題が 1 件も無かったので、来年以降 CROI でオーラルの発表をすることを目標に研鑽を重ねる所存です。